

一万日目を歌えるか 本田一弘

八月六日朝のニュース番組を見て驚いた。東京の十代の若者三十五人に「八月六日は何の日?」と聞いたところ、咄嗟に答えたのは八人だつたという。きちんととした統計ではないので一概には言えないが、六十九年前におよそ十四万人の生命が奪われた重大な歴史的事実が今の子供たちには自分とは無関係の遠い出来事になっているのだ。先日、横浜の中学生が長崎に修学旅行に行つた際、被爆体験を語っている男性に「死に損ない」という暴言を浴びせたのもその一つの表れだろう。

何もこれは広島や長崎のことだけではないはずだ。太平洋戦争然り、そして三年半前におこった震災も然りである。ありきたりの言葉になつてしまふが、記憶の風化を少しでも食い止めなくてはならないと私は考える。少なくとも直接今度の震災を体験した歌人は震災を歌い続けなくてはならないと思う。

その先頭集団を走っている歌人の一人が梶原さい子である。宮城県在住で「塔」に所属している。梶原はこの五月に第三歌集『リース／椿』を出しておらず、本誌八月号の大口玲子の時評でもこの歌集は採りあげられていて、大口が「肉体」をキーワードにして丁寧に読み解いている。今まで必読の歌集である。

その梶原が中心になつて震災以降、発行している雑誌がある。

『99日目』、『366日目』、『73日目』、『1099日目』とこれまで四冊発行されている。最新の『1099日目』は平成二十六年七月十一日発行、塔短歌会のメンバーで東北に閑わりのある十八人が十首ずつ短いエッセイとともに寄せているとともに、「今振り返るこの三年」と題した長めのエッセイが十編収められている。

・長き棒突き刺し不明者捜索さるる雪降る海岸一〇〇〇日目にも

・どこかには埋めねばならぬどこかなるそのどこかとふ実存が必要
り 梶原さい子(宮城県仙台市出身 宮城県大崎市在住)
・四年ぶりに職安に来つ被災者か否かを分ける欄できており

田宮智美(宮城県仙台市在住)

一首目、震災から千日経つてゐるが、行方不明者の捜索がいまだに行われてゐる現実を破調ながら訥々と歌う。「雪降る海岸」の風景が何とも悲しい。二首目、この一首だけではわかりにくが、前後の作から主語は震災に伴う廃棄物。三年という時間が経過したが、廃棄物を最終的に置く場所が決まらない。これが現実だ。時間は何も解決してくれない。「実存」という堅い語が膠着した状況をよく表してゐる。三首目、公的な書類に「被災者か否か」を分ける欄ができる。淡淡とその事実を歌つた作だが、作者の疎外感が伝わってくる。もう私たちの目は「被災者か否かを分ける」眼鏡をかけてしか人々や物事を見られなくなつてゐる。巻末に「一万日目を歌う」というエッセイがあり、はつとした。一万日目一二七年と百四十五日目—それまで私たちは震災を忘れることなく歌い続けているだろうか。未来の若者に忘れられないためにも私たちは歌を作り続けなければならぬと強く思う。